

名芸大でトライアウト公演

名古屋芸術大学東キャンパスで昨年11月27・28日にリーディングシアター『らい・だつと』と同大によるトライアウト公演、朗読劇『フリゴ、もしくは…冷蔵庫』が上演された。

パリで活動していたアルゼンチン出身の劇作家コピの原作を同大学の准教授であり演劇研究科の西村和泉さんが翻訳し、深澤伸友さん(P.A.P.でらしね)が脚本、演出を行なった。朗読は俳優で朗読家の榎原忠美さん(劇団クセックACT)と俳優のジル豆田さん(てんぷくプロ)。

観客の想像をかき立てる

舞台上には椅子が一つと役者が2人のみ。効果音や光、朗読の本来が演出となり、ストーリーが進むに連れて観客たちは息をのんで展開を見守っていた。

観劇した50歳代の女性は「加齢と性と生、人間関係の問題が迫ってきて、胸が締め付けられるような思いで見ました。若い人を見るとまた違う感想を持つのでしょね。これを40歳代で書いたコピという人にも興味を持ちました。別の作品もぜひ翻訳して上演してほしいです」と話した。



同作品は今年、名古屋市内の劇場で公演、2023年には、演劇祭アヴィニヨンフェスティバル・フリンジにエントリーを予定している。

独特の作風と挿絵で表現

名芸 新博物誌展

名古屋芸術大学東キャンパス内アート&デザインセンターEastで昨年11月26日～12月8日に、『新博物誌展』が開催された。

同大デザイン領域文芸・ライティングコースでは、毎年授業の一環としてジユ

ール・ルナルの『博物誌』を下地に、3年生が自ら生き物を探し、その特徴を捉えて文章で表現している。その文を元に、日本画・洋画・コミュニケーションアート3コースの

学生有志が絵を描き、8月から学生らが編集作業

をして10月には冊子『新博物誌』2021としてまとめた。

今回初めて『新博物誌』の冊子から学生らが選んで挿絵の原画と文章を展覧会として飾った。キリンや鯨、夜叉髑髏(やしゃごくろ)など、幅広く自由な発想の作品が展



示された。

冊子制作にも携わった文芸・ライティングコースの長谷川大悟さんは「いつもなら通り過ぎてしまいうような瞬間を改めて動物の顔や行動、鳴き声や匂いを感じとり、文章に表す。その新たな気付きを与えてくれたのが、この新博物誌

だったなと感じます」と作品を見ながら語った。また、挿絵を描いた日本画コース3年の片山マリラマン

カオさんは『新博物誌』への参加はこれで2度目になりますが、今回は展覧会や編集作業など学ぶ機会が多く、とても貴重な体験ができました。数々の動植物のテーマは作者独特の作風でつづられていました。文章から醸し出される表現を読み、私の作画によっていかにそれを引き立たせることができるのかを考えました。実際に作者にコンタクトしてみたり、一度下書きにしたものに意見をもらったりと普段体験しない経験が多くあり、とても楽しかったです」と満足げに話した。